四季の演技

四季の演技

丹羽文雄

四季の演技　¥ 230

昭和33年5月30日　初版発行
昭和33年6月10日　再版発行

著作者　丹羽文雄
発行者　角川源義
印刷者　中内佐光
製本者　鈴木俊一
発行所　株式会社 角川書店（かどかわしょてん）
東京都千代田区富士見町2ノ7
振替口座 東京 195208番
電話 九段 (33) 0111(代表)～5

Printed in Japan　暁印刷・鈴木製本
落丁・乱丁本はお取替え致します

目

次

母の影　七
湯の宿　一四
美しい妹　二四
もう一人の妹　三五
モデルと家計　四三
カクテル・パーティ　五一
世間知らず　六〇
偶然　七三
峰品子　八四
重大なこと　九六
翌朝　一〇六
別居生活　一二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

熱海と新富町　二二五
漁色家　二三五
春の彼岸　二四五
萌ゆる草　二五四
母の行方　二六六
商事の危機　二七九
脆さ　二八八
隣の部屋　二〇二
朝の人　二二三
那須　二四四
街で　二五四
ある節度　二六一

主婦の怠慢　二七二
迷い　二七七
天の網　二八五
その夜の人々　二九六
再び那須　三〇七
すれちがい　三二五
舞台の終り　三三八
あとがき　三三一

四季の演技

母の影

障子の下半分に、陽があたっていた。その反射が、書斎の中に夢心地の和やかさと、静けさをもたらした。陽の色が恋しくなれば、十一月の声を聞く。陽脚があるかなしかの動きで、移動していた。

原稿用紙に向っていた清水谷暁が、ふと、顔をあげた。障子に人影が映ったからである。たれかが、庭先にまぎれこんだようである。最初は、通りすぎる影のように映った。が、立ちどまり、こちらを向いた。女の影であった。和服姿であるが、若い女ではなかった。影は、しきりと書斎の気配をうかがっている。書斎だけでなく、家の中全体に、神経を走らせているらしかった。

清水谷は、静かにペンを置いた。

「暁さん？」

あたりにはばかる女の声がした。清水谷は黙ったまま、障子を開けた。

「吟子さん、まだお休み？」

清水谷は、頷いた。すでに、正午に近かった。

「旅行ですか、お母さん」

「ええ、ちょっとね、でも、一晩泊りよ」

旅行用の小さい、緑色の鞄をさげて母親の浦子が、窓に近付いた。庭は、傾斜になっていた。母親の背丈が、急に伸びたように、映った。

「いくら近所に住んでいるからって、お母さんは、いつだって庭先からはいって来るんだ。堂々と玄関からいらっしゃい」

母は苦笑して首をふった。

この家全体が、崖の中途に建てられていた。玄関からはいると、書斎が地下にあたるが、庭先からはいって来ると、玄関が二階についていることになる。道路と庭の間に垣根がなくて、出入は自由であった。また、はいりやすい。

「ね、毎度のことで言いにくいんだけど、お小遣をすこし頂戴」

「お母さんは、先月もその前の月も旅行しましたね」

「私にだって、いろいろとつき合いがあるでしょう。そうそうはつき合っていられないけど、三度に一度は顔を出さないと具合が悪いのよ」

「昔のつき合いですか」

浦子は昔、日本橋の或る料亭の女中頭をしていた。四十八歳にしては、いやらしいほど若すぎる。目が大きくて、口が小さく、色が白かった。その白さがすこし病的なくらいである。石膏の白さに似て、沈んだ色である。どことなく素人ばなれがしていて、誰の目にも、水商売の女と映った。それがまた、本人は得意であるらしい。年齢から見て、料亭の女将風である。

「吟子さんが起きていては、言いだしにくくてね」

「吟子は、昼すぎでないと起きて来ません」

「この家も、たしかに変っているわ」

「吟子にとっては、睡眠が何よりの美容法ですから、自然と目をさますまで、そっとしておいてやるんです」

「桃子がときどき、口惜しがるんですよ。お母さんに先見の明がなかったから、平凡に結婚を押しつけられたけれど、私だって吟子さんのように、ファッション・モデルになることだって出来たのだって……」

その口惜しさには、母親の分もまじっているらしい。

「小遣いって、いくらぐらいあったら、いいんですか」

「熱海によばれているの。汽車賃は用意しているんだけど」

「それじゃ、一晩か二晩の宿泊料で十分ですね」

「それだけで結構よ」

机のそばの小引出しから、清水谷は財布をとり出した。何枚かの千円札を渡すと、母は無造作にハンドバックに納めた。

「吟子さんに内緒ですよ」

清水谷は、苦笑した。吟子が出す金じゃあるまいし、どうして母は、吟子を煙たがるのか。敬遠の仕方が、すこし非常識なほどである。それほど吟子を敵視しているのか。母の浦子は、そそくさと、窓を離れた。熱海にいく相手が、昔の朋輩か、それとも異性か、清水谷はこだわらなかった。

母の去ったあとには、はるか向うに新宿が一望のうちに眺められた。新宿の街を歩いているのでは、想像も出来ない高層建築の密集である。その一つ一つの建物が独自な色彩をもっているのだが、遠くから眺めると、一様に灰色だった。雑多な色がいりまじって、却って灰色一色に還元されたようである。それはまた、生活という抽象的な色彩でもあった。

仕事をしている間は、障子を開けないことにしていた。が、夜になると、不夜城とは平凡な形容だが、それ以外

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

の適切な表現がみあたらない。
だしぬけに書斎の扉が開いた。吟子が、ピンクの地にバラを刺繍したガウンを羽織り、両手をかくしにつっこんで、のしかかるように清水谷を見下した。四畳半の和室では、一メートル六六の肉体があふれるばかりである。
「お早よう。いまお目ざめか」
それには答えず、
「また、お母さんが無心に来たの」
黙っていた。
「仏の顔も三度ってことがあるけど、あなたの顔は何度拝ませたら、気が済むの？　お母さん、小遣に不自由してるはずがないわ」
「そんな風に言わなくてもいいだろう。小遣ってものは、いくらあっても欲しいものだ」
「あなたが出すから、いけないのよ。ますますずうずうしくさせるばかりだわ。今だって、家を出がけに、ちょっとここへ寄ってやれ、小遣をくれるかも知れないからというほどの気持よ。いきがけの駄賃だわ」
「吟子には、ひどく気がねしているよ」
「はらの中が、私にまる見えにされているからよ。あなたは長男だから、それも出来ないでしょうけど、私には情容赦なく洞察出来るわ。お母さん、どこへいったの」
「熱海と言っていた」
「ふふん、たれと温泉へいくんでしょうね」
清水谷は、いやな顔をした。それが面白くて、吟子は窓に腰をかけて、向かい会った。窓がふさがれた。
「あなたのお母さんを冒瀆（ぼうとく）することになるかもしれないけど、第三者の遠慮のない想像では、女同士の熱海行とはうけとれないわね。だってあなたのお母さんが、これまで、どこかの家庭の、ちゃんとした奥さんと特に親しいということも聞いてないわ。ＰＴＡのつき合いでもないでしょう、もっとも桃子さんも春江さんも、とうに学校を卒業しているから、ＰＴＡの交際はなくなっているわ。それとも昔の朋輩かしら」
「何しろぼくには、四、五年の母親だ。それまでの母親がどんな生活をおくって来たか、よく知らないんだ」
「あなたは生まれたばかりで、お母さんに捨てられたんじゃないの」
「そうだよ」
「あなたが小説家として、名が売れて来たものだから、お母さんが名乗り上げて来たんじゃなかったの？」
「多分そうだろう」

「あなたが名を挙げず、田舎にくすぶっていたとしたら、お母さんは一生涯顔を見せなかったでしょうね」

「そうだろうね」

吟子が、自分の膝を叩いた。そんな清水谷の性格に、我慢がならないといったジェスチュアである。すべりのよいガウンが滑って、膝がまる出しになった。睡眠の足りた肌が匂うようであった。いくら良人に向ってとはいえ、あらわすべからざる個所までさらけ出して平気でいるのもファッション・モデルの習性だろうか。

「若しお母さんが昔馴染の客と温泉にいったとしても、それはかえってあなたが、けしかけていることになるのよ。第一私は、お母さん達がこの近所に引越して来たことには、大反対だったのに、あなたが甘いものだから……」

「甘いといわれては、一言もないが」と、清水谷は自分の心をふりかえるようにして、「たしかにぼくには、母親が珍しかった。珍しすぎたので、つい、その扱い方にまちがったかも知れないよ」

むき出しの膝が、眩しい。そこに陽があたっていた。吟子は、起きぬけの肌に陽を受けていることが、快感であるらしい。必要以上に、肌をさらしている。日光浴のつもりらしかった。

「同人雑誌に発表した小説が、文学賞を得た。それからとんとん拍子に、原稿が売れるようになり、ジャーナリズムに名前も表われた。そのため、ぼくの存在が母の目にとまった。そのことを、ぼくはすこしも意地悪くは考えられないのだ。後悔もしてないよ。よかったと思っているくらいだ」

「世間をごらんなさい。子供のころに捨てられたのを恨みに思って、その母親が老人となって、明日のくらしにも困るようになって、たよって来た時、その子供は玄関払いをくらわせたわ。母親はとうとう、どこかで、のたれ死してしまったわ。子供は一生母に対する恨みを持ちつづけていたのよ。その生き方が、またその人の人生観を支えているんですからね」

「ぼくは、駄目だ。ぼくには、とてもその人の真似は出来ない」

と、首を振る。ぞっとするような否定の仕方であった。

「何も、その人の真似をなさいとはすすめないわ。だけど、いまの世の中は、それぐらいのきびしい覚悟をもっていなければ、生きていけないというのよ。お母さんの生き方に対して、あなたって、何も批判が出来ないじゃ

ないの。それでも、小説家といえるの？　あなたのお母さんはね、自分が一生困らないために、桃子さんを十九も年上の、単に金があるというだけの男に嫁にくれてやったのよ。嫁がせる時、母親の生活費を毎月おくるということが、唯一の条件になってたというじゃないの。娘を売って、左団扇でくらしている親と同じ理屈じゃないの。そんな母親に、また小遣をくれるなんて、あなたってちょっと類がないほど甘ちゃんだわ」

「しかし、金はぼくが稼いだものだ」

「そんなことを私が言ってるんじゃないわ。あなたが稼いだ大切なお金だから、よけい腹が立つんだわ。もっと意義のあることに使って頂戴」

「ぼくはまた、母親に小遣がやれることに、満足しているよ」

あきらめたように、吟子が苦笑して立ち上った。そして、言った。

「食事にするわ。あなたもつき合って頂戴」

ひとりで食べる食事は拙いという理由からである。清水谷は、バラの刺繍の腰部のボリュウムを見挙げていたが、何を思ったか、やにわに立ち上った。

豊かな、柔らかな腰部を、うしろから抱えるように押しながら、清水谷はふざけにかかった。

「これでも、小説家だよ、母もまた女なりだ。感情をまじえないでぼくは観察している、母は四十八歳だ。若いんだ。しかし、これほどでもないが」

と、痛くない程度に一つ叩いた。その手応えには、気の遠くなりそうな魅惑があった。

「くすぐったいわ」

ぐらりと腰がゆれた。二人は、食堂にはいった。

「自分のものでありながら、母はわが肉体の始末がつかないんだ。本能には弱く出来ている」

向い合った顔を、吟子はつき放すように見た。

「それを、子供のあなたがみとめているの？」

「主観をまじえない観察だ」

「その本能に、あなたとしたら、数々の恨みもあるんじゃないの。その本能のために、赤ん坊のあなたは捨てられたのよ。お母さんは恋人のところに走ったのよ。本能を抑えるだけの人だったら、生みっ放しで逃げ出すこともなかったでしょうにね」

吟子は、食事については大して神経を使わない。何でも食べる。酒ものむ。ファッション・モデルが雑誌などに麗々しく発表する美容健康法など、一笑に付している。

そんなことをしたところで、もって生まれた肉体が変化するものではない。足が半インチ長くなるものでもない。無理やりウエストを細めて、からだを弱くするなど、愚の骨頂である。但し、夜ふかしはしなかった。睡眠は十分にとる。これだけは、厳しく守っていた。

「近頃は段々と、あなたを訪ねてくる客も多くなったわね」

「呼鈴が鳴るたびに、みんな一柳吟子の客ばかりだったから、ぼくに客があると、妙な気がしたものだった」

玄関に、二人の表札が掲げてある。が、吟子の方が派手に出来ていた。そういえば、この家の登記は、吟子の名前であり、電話も吟子の名前になっていた。崖の中途に建てられた、こじんまりとした、洋風の、もっともモダーンな建物は、吟子の設計である。万事が吟子に都合のよいようにつくられている。四畳半の和室だけが、清水谷に与えられていた。

犬は、その家の主人を敏感に正確に見定めるといわれる。男の主人とは限らない。一家の実権者の意味であり、この家に犬が飼われていたならば、当然吟子になついたであろう。十八歳になる、小柄な女中のキクは、吟子の方に付いている。吟子をおそれていた。

吟子が急に片肌を抜いた。乳房までまる出しだ。清水谷は、呆気にとられた。いささか露出症気味である。二十度という隆起角度である。二つの隆起の間には、息詰まる感覚があった。

「私の肌をよく見て頂戴」

「どうかしたのか」

「私の肌が荒れているか、どうか、よく見て頂戴」

ふざけているのではなかった。が、どうして急に吟子がそんな気になったのか、清水谷には理解出来なかった。清水谷は、椅子をはなれた。そばに来て、医者のように肌に顔を近付けた。肩から腕にかけてのなめらかな、充実した容積を舐めるように撫でた。肌の匂いを嗅いだ。清水谷の目いっぱいに、若くて健やかな肉体の広野がひろがった。広野は、息づいている。

「昔とおなじだ。すこしも荒れてなんかいないよ」

「そうでしょう」

まるで誰かの非難に対するような口吻である。

「この肌の美しさは、大勢のモデルの中でも特に自慢なんですからね。女は生活が荒れると、てきめんに肌が荒れてくるものよ。そういうモデルを、現にいく人か私は見ているわ。こわいくらいよ」

「近頃の吟子の生活が、心配になったというのか」
「荒れてなんかいないわ。だけど、口ではいくらそう言ったところで、肌が荒れてきては弁解が立たないでしょう。論より証拠よ、この肌をよく見て頂戴」
「吟子は品行方正のファッション・モデルだ」
吟子は、必要以上にわが肌を清水谷に見せつける。疑う余地はなかった。が、吟子が逆手を使っているのだとは、清水谷も気が付かなかった。清水谷の真面目くさった保証が、吟子にはくすぐったいのである。肌の荒れないのは、何かそんな素質が自分に先天的に恵まれているように思われる。当然荒れてもよいはずだった。
「女はずうっと一人の男とむすばれていると、美しくはなるが、荒れないものだといわれているわ」
「中年の奥さんで、いかにもそういう美しさを感じさせるひとがあるね。貞操が肉体の美に換算されるんだろうね」
「私の肌の美しさは、四、五年間、たった一人の男を守ってきたからだわ」
腹にもないことを、吟子は言った。いかにも言葉がのめのめと口を滑る。腹の中は誰にものぞけないものだ。
「そうだろう。そうでないと、ぼくは困る」

吟子は、平川忠良に温泉に誘われていたことを思い出し、私の肉体はほかの女と組織がちがっているのだと思った。肉体が自信をつけてくれる。しかし、それは若さのせいだった。若さのもつ強さと、無分別は、ある程度の生活の荒れも糊塗してしまうようである。
「だけど、あなたのお母さんは、年齢にしては、肌がきれいだわ。不思議ね」
「母親がいつまでも若くて、美しいということは、子供にとってはうれしいことだよ」
「それが、甘いというのよ。そういう考え方は、少女趣味だわ。自分の母親がいつまでも若くて、美しいことに、子供はやりきれなくなるものよ。母親は、子供の成長と同時に、早く老人になってもらわないと、やりきれなくなるわ。あなたには、それがまだ判っていない」
「いやだね、吟子の説はまるで老人だ」
「それじゃ、桃子さんといっしょにあなたのお母さんが、いま子供を生んだとしたら、どう思う。あの調子じゃ、あなたのお母さんは更年期にもはいっていないわ。その可能性は、十分にあるでしょう。その時の桃子さんの気持を想像してみてごらんなさい。自分が抱いていると同じような赤ん坊をお母さんが抱いていたとしたなら理屈

はどうあろうと、やりきれない気持だろうと思うわ」

清水谷は、養母によって育てられた。邪慳にされたわけではなかったが、長ずるに従って、生母を恋い慕う気持が昂じる一方であった。中学生の時から、文学に興味を抱くようになったのも、一つには、満たされない心の寂しさを文学によって補おうとしたものだった。清水谷は、すこしも母を恨まなかった。自分を捨てて、恋人のもとに走った母の生き方を、むしろ純粋だとさえ思うようになった。情熱のもつ美しさである。その美しいものが、自分にもうけつがれているという考え方は、どれほど清水谷をはげまし、なぐさめ、満足させ、夢を抱かせたか知れないのである。

四年前、母の浦子が突然、訪ねて来た。二度目には、春江をつれて来た。三度目の訪問には、すでに結婚している長女の桃子をつれて来た。浦子は、清水谷の小説をいくつか読んでいた。

「暁さん」

と、母は呼んだ。二十六年も呼び慣れていたように、母は心やすく口に出した。そこには何の不自然もなかった。二十六年間、母の心のどこかで、その名が絶えずささやかれていたようである。

「暁さんが小説を書くようになったのは、お父さんの血のせいですよ。お父さんのそのまたお父さんは、永い間神主を勤めていた、由緒のある家柄の出だったのです」

が、目が大きくて、男にしては口の小さいところは、母親似であった。

若い美しい母、父親違いの、美しい妹二人を迎えて、清水谷の人生が書き換えられた。清水谷は狼狽したものである。うれしい驚異であった。その時の感動が、いまも強く尾をひいている。

湯の宿

度重なる火災のあと、再建された熱海の街は、へんに白っぽく眺められる。モルタル塗りか、コンクリートの建築以外が許可されなくなったせいであろう。浦子は湯上りのからだを、縁側の籐椅子でやすませていた。度々、この湯の街に来ている。何となく昔の熱海とは変っているように感じられるのだったが、そのわけには思いつかない。そんな方面には、頭脳が働かない。

「海は、冷たそうね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.